『西南アジア研究』No.47, 1997

メソポタミアとエジプト
——紀元前三千年紀の交流とジルベール説の当否——

小野山　節

1　メソポタミア文明にエジプトからの影響は認められないか

昨年「メソポタミア初期王朝期の丸彫人物像——そのエジプト的要素——」と題する論文を発表した[小野山 1996]。これはメソポタミアで発見された初期王朝期の丸彫人物像のなかに,現在の定説とは違って,エジプト彫刻の影響が認められることを,主要な6つの特徴を挙げ,特殊な2例を加えて検討したものである。6つの特徴というのは,メソポタミア彫刻のうち(1)左足を前に出す立像の姿勢,(2)倚坐像の存在,(3)とくに夫婦倚坐像の存在,(4)胡坐をかく像の姿勢,(5)振分け髪にした頭髪の形,(6)蛇腹形の顎ひげの形である。そして特殊な形であるため,同類の資料がこれからも発見される可能性は殆どないが,エジプト彫刻からの影響と考えられるものとして,エシュヌンナ王立像の台座正面に浮彫を施すことと,エシュヌンナ王妃立像に伴う女児像の存在とを挙げた。

メソポタミア初期王朝期の丸彫人物像の特徴にエジプト彫刻と共通するもの,あるいは類似するものがあることを問題にしたのは,もちろん私が最初ではない。

バビロニアの北に接するディヤラ河流域の都市エシュヌンナ(テル=アスマル)やカファジャ遺跡から,初期王朝期に属する多くの彫刻を発掘したフランクフォート H. Frankfort は,その報告書において個々にエジプト彫刻の類似品を取上げ,メソポタミア彫刻との違いをかなり詳細に指摘している[Frankfort 1939, 1943]。その上でフランクフォートは,双方の相違点を強調し,メソポタミア彫刻とエジプト彫刻とはそれぞれ別個に発達したものであると主張した。フランクフォートのこの見方は,ジャムダト=ナスル期のメソポタミア文明が先王朝時代から第1王朝初めのエジプトにかなり大きな影響を与えているという,後に定説となった学説と一連のものであって[Frankfort 1941, 1951],その後も変更されることはなかった[Frankfort 1954]。

またメソポタミア考古学の発達に主導的な役割を果した,あるいは活躍中の研究者たちも,それぞれ別個に検討したうえでその内容を発表していないだけだろうと推測する外ないが,論文やモノグラフや概説書から判断する限り,メソポタミア彫刻は独自に発展したものと信じ切っているように見受けられる。紀元前三千年紀のメソポタミア文明にエジプトからの影

響が認められるという異見が存在するにも拘わらず,無視して反論することさえしていないのはそのためであろう。

その一つの異見を,50年近くも前に発表されたものだが,私のエジプト彫刻影響説に先行する見方として紹介し,その見方が現在のメソポタミア文明の歴史的理解になぜ影響を与えないままできたかを検討しておきたい。このような観点から,ここではメソポタミア文明の連続した発展が学界に承認され,エジプト文化一元論が退潮してしまった1940年頃以降を問題にする。

ジルベール Pierre Gilbert は1951年に,エジプトとメソポタミアで併行していてほぼ同時期に属する美術的類似品を取上げ,これらを両文明の間に交流のあった結果と認める8項目を検討した。そのうち1つだけをメソポタミアからエジプトへの影響によるものと見做し,エジプトからメソポタミア文明に与えた影響として7項目を挙げた[Gilbert 1951]。ここで問題にされているのは,前四千年紀末から前三千年紀にあたり,メソポタミアではウルク期末またはジャムダト=ナスル期から初期王朝期をへてアッカド王朝に及ぶ時代である。しかしメソポタミアから影響をうけたエジプト先王朝時代と第1王朝初めの問題は,極く簡単に言及されているだけで,検討の対象からは除外されている。メソポタミア考古学ないし美術史の全著作に当った訳ではないけれども,著作活動の目立つ研究者でジルベールのこの論文に注目しているのはフランスのコントノ G. Contenau だけであった[Contenau 1952]。

上記の論文において私がエジプトからの影響を問題にしたのは丸彫人物像だけであるが,両文明の影響関係は特定の狭い分野に限られる筈はないので,その意義を歴史的な問題に展開しようとすると,検討する対象を丸彫人物像から彫刻全般に,工芸品に,さらに建築等にも拡大してゆくことが要求される。

エジプト文明とメソポタミア文明に認められる共通の特徴として,ジルベールが挙げた8項目というのは,(1)宮殿の正面を表した円筒印章,(2)多彩に象嵌を施した石製容器,(3)階層的に建設されたジッグラトの形,(4)テル=アスマルのアブ神殿出土の「蹲居像」,(5)楽器のがらがら,(6)盾飾の外に向う二頭の獅子の浮彫,(7)ウバイド出土の胡坐をかいて礼拝する人物像,(8)アッカド王朝ナラム=シン王の戦勝碑の人物表現である。このうち(2)だけがメソポタミアからエジプトに影響したもので,他の7項目はエジプトからの影響によるメソポタミア文明の特徴であるという。そして(4)と(7)が初期王朝期の丸彫人物像の特徴であって,私が前稿において問題にしたのは胡坐の礼拝者像だけであった。

ところが,エジプトとメソポタミアの関係について先史時代から中王国時代末までを検討したウォード William A. Ward は,ジルベールの挙げた8項目のうち楽器のがらがらを除き,他の全項目についてメソポタミアの美術に対するエジプトの影響とは認め難いと1964年に主張した[Ward 1964]。楽器がらがらについては全く言及していない。しかし当然のこととして,ウォードの行った検討が妥当なものかどうか,提示されたその結果が納得できるものかどうかについてもまた吟味しておかねばならない。このことは,メソポタミア考古学または美

術史の研究者たちが,メソポタミア文明のなかにエジプトからの影響を認めようとしない研究姿勢を問うことにもつながる。

なお,ウォードがエジプトとメソポタミアの関係を議論した主題は,両文明の間に直接的な交流が認められるかを問うことにあり,その目的にそって双方に共通する特徴を,またかつてそう考えられたことのある特徴を取上げたものである。それらを検討して,ウォードはジルベールの挙げた要素を否認したうえで,エジプトとメソポタミアの交流は間接的なものであったと主張する。ジルベールの提唱の外にウォードが検討した要素には彫刻が含まれていないこと,また両文明の交流を認めた上で,その接触が直接的か間接的かという議論をするには多方面からの検討を要するので,別の機会に譲りたい。

そしてまた,ジルベールの挙げた項目のうち宮殿正面文円筒印章と多彩象嵌石製容器とは,初期王朝期以前に起ったシュメール文明のエジプトへの影響と認められるので,ここでは上記の(3)から(8)までの6項目だけを問題にする。

2　「蹲居像」と胡坐像

まず丸彫人物像を問題にしよう。ジルベールがエジプトの影響によってつくられたと判断した丸彫像は,メソポタミア初期王朝2期に属するテル=アスマルの方形神殿Ⅱから発掘された「蹲居像」と,ウバイドのニンフルサグ神殿の近くで発掘された胡坐の姿勢で礼拝する初期王朝3期のクルリル像とである。クルリル胡坐像は,前稿においてエジプトからの影響による例(エジプト的要素4)としてすでに述べたものである。

テル=アスマル発掘の「蹲居像」は,フランクフォートの報告書において kneeling figure と呼ばれている。ジルベールもその姿勢を l'attitude agenouillée と説明した。この英語とフランス語を日本語にかえると蹲居像ということになる。欧米系の研究者にとっては,おそらくこのように呼ぶのが常識であろう。しかしここで「蹲居像」と鉤括弧に入れて条件付きとしたのは,後で述べるように,この像は爪先を伸しているので,像の姿勢を正坐像と認識して膝をつく蹲居像と区別する必要があり,そうすることがシュメール彫刻の歴史を考えるうえで重要と考えるからである。

「蹲居像」は腰から肩までのおよそ右半分を欠いたまま潰された状態で発見されて,現在の形に復原されたものである。またこの像が本来の役割を果していた時代にも破損して修理した跡が認められるというから,最初からこの形に造形されたかどうかは確実ではないが,ここで問題にしようと思う重要な大腿と脚部と足部は本の形のままと見てよい。像の高さは21cmあり,シュメール丸彫像には珍しく裸で,腹に帯をめぐらし,頭に被り物をつけて,上から穴を穿ってある。さらにメソポタミア丸彫像として特異な点は,「跪く」その姿勢にあり,また暗い琥珀色の半透明アラバスターという材質にもある。「蹲居像」とともに発掘された14体の他の丸彫像と,その材質が違っている点からも,フランクフォートはエシュヌンナ(テル=アスマ

ル)とは全く異る工房で製作された外来の彫像であろうと推測している[Frankfort 1939]。

この「蹲居」の姿勢はメソポタミア彫像に稀なものであるけれども,エジプトでは先王朝時代や原王朝時代(Protodynastic=第1・2王朝, Early Dynastic Period 初期王朝期ともいう)の象牙彫刻によく見られるので,そこから借用したと見ることができるとジルベールは主張する。一方ウォードは,「蹲居」の姿勢がメソポタミア彫像として稀なものであることを認めながら,だからといってエジプトからの,特にその原王朝時代からの影響とは言えないと断定するだけで明確な根拠を示さない。そればかりか,フランクフォートがエジプト美術にも詳しく,文化的な影響関係にも深い関心を持っている点を強調して,エジプトからの影響と評価しない彼の見解に全面的に依存しているだけである。

正坐像と蹲居像という2つの形式に,その姿勢によって kneeling figure と分類される丸彫人物像の一群を分けると,正坐像の由来はウルク期のシュメール文明に求めることができる,というのが私の見方である。確かにエジプト原王朝時代の象牙彫刻や石造彫刻のなかに,正坐像が認められることもあるが[Quibell 1900 ; Petrie 1903],それらは浮虜の姿であるか,輪郭の明瞭でないことが多く,その上小型品である。40cm前後の石造丸彫人物像に正坐像はなく,それとは異なる姿勢,すなわち足をたて踵に尻をのせて両膝をつき,両手をそれぞれの膝にのせた蹲居の姿勢をとっている。蹲居像というのは,この姿勢に限定する方が,丸彫人物像の形による分類として有効なように思われる。

ウルクにおいて1912年—1913年にパルティア時代の神殿を発掘したとき,小型の石造丸彫人物像が4体出土した[Jordan 1928]。この4体は層位的発掘の出土品ではないうえに,その当時,類似品も知られていなかったので,考古学的にも美術史上からも長期にわたって無視されてきた。ところが1957年から1958年冬の発掘シーズン中に,ジャムダト=ナスル期ないしウルク期末と考えられる石造丸彫像の上半身の破片が発掘された。この丸彫男子像はヘアバンドを締め,立派なほおひげとあごひげをつけていて,50年近く前に発掘された丸彫人物像4体と上半身の特徴が類似するところから,この4体もウルクⅣ層(ウルク期)かⅢ層(ジャムダト=ナスル期)の時代のものと推定することが可能になった[Lenzen 1960 ; Becker 1993]。その4体のうちの3体が正坐の姿勢をとり,膝の上で両手を組合せている。正坐像の1体は四角い塊状に作られていて,頭部は顎を突き出している。これらの小型像をいち早く評価してメソポタミア美術史上の位置付けを行ったモールトガート Anton Moortgat は,これらの彫像を浮虜の表現と考えたけれども[Moortgat 1967],彫像の顔面の何かを見上げるような様子は,神殿の造営に情熱を傾けたウルク期シュメール人の神にたいする敬虔な姿を表わしているように思われる[小野山 1975]。なお正坐の姿勢で表現された丸彫女性礼拝者像がスサで出土している[Strommenger 1964]。

テル=アスマルで出土した初期王朝2期の丸彫人物正坐像が,どのような形で継承されてきたかはまだ分らないし,資料の空白の期間もかなり長期にわたるが,先行する正坐像を持っていることになるので,エジプトとテル=アスマル出土像の表現に特別な共通性が認められない

限り，初期王朝2期の正坐像の存在をエジプトからの影響と見る必要はない。むしろエジプト原王朝時代の正坐像がメソポタミアの影響によってつくられた可能性もある。

クルリル胡坐像は，ウル第1王朝の王ア=アンニ=パダ A-anni-padda がウバイドに建設したニンフルサグ Ninhursag 神殿に属する丸彫礼拝者像である[Hall and Woolley 1927]。胡坐像は他の遺跡からも若干例が出土しているけれども，メソポタミアでは稀な姿勢で，エジプトの第4王朝から始まり，特に第5王朝に多くなるので，エジプトからの影響であることを示唆している，とジルベールは言う。胡坐像については前稿でも述べたように，私も同じ意見である。ウォードは，ウバイド出土例のほかにも胡坐像があるから，それはシュメールの彫像伝統から生まれた形だと主張する。エジプトの影響によってつくられたどんなものでも一例だけということはなかろう。

3　楽器がらがらと外向二頭獅子文と戦勝碑の人物表現

ここで取上げるのは丸彫人物像とは異なる種類のものである。メソポタミアの丸彫人物像にエジプト彫刻からの影響が認められるとすると，検討すべき次の課題として，初期王朝期の浮彫にはエジプトからの影響はないか，さらに青銅彫刻ではどうか，また彫刻以外の文化要素にはエジプトの影響と考えさせられるものはないかなどと，メソポタミア文明全般にその視点を拡大してみることが必要である。現在のところはメソポタミアとエジプトの交流を総合的見地から検討する用意はまだないけれども，両文明の影響関係を検討するための手掛りとして，ジルベールの挙げたものからここでは3項目を選んで極く簡単に見当をつけておきたい。

がらがらというのは，木や金属でつくられた棒状のものに，金属などの小円板を通して枠にわたし，柄をつけた楽器である。柄をもって手で振るとガラガラと音を出す。エジプトの女神ハトホル Hathor に関連して，神殿で行われる祭儀や儀式の行列などでよく用いられ[Pinch 1993；Robert 1995]，古王国時代にもあった。

ここではがらがらという表現を用いたが，外に「シストルム」とか「振鈴」と表わされることもある。シストルムは英語の sistrum を片仮名で表わしただけであって，専門家以外には殆ど分らないであろう。ドイツ語でも sistrum と書き，フランス語では sistre，いずれもラテン語の sistrum がもとで，このラテン語はギリシア語の「揺する」という動詞に由来するセイストロン seistron という名詞を引き継いだものといわれる[プルタルコス(柳沼訳) 1996]。エジプト語でどのように書き，どう発音するかは知らないが，一方またその意味を込めて「振鈴」と和訳した例もある[ドマ(大島訳) 1966]。しかし，鈴の音というと，神楽鈴のように「ガラガラ」に近い例がないわけではないが，われわれは一般に澄んだ高い音を連想しやすい。そこで「がらがら」の表現を選んだ。sistrum の構造の説明と写真および図をみると，この方が実際の音を連想しやすいと考えたからである。

ただしこの表記は問題がない訳ではない。有名な「シヌへの物語」では,「メニト首飾りやがらがらやシストルム」というような語句があって,がらがらとシストルムが別物として表現されている[屋形 1978]。この問題とどう係わるか正確なところは分らないが,マッニシェ L. Manniche によると,シストルムは祭式用 rattle であるという[Manniche 1991]。rattle というのはガラガラと鳴る器具のことである。

エジプトとの交流を議論するとき,いつでも引用されるシュメール発見のがらがらは,リラの共鳴箱に貝殻モザイクで表わされたもので,ウルの王墓789号墓から1927年にウーリー C. Leonard Woolley によって発掘された。リラの共鳴箱の正面,下がやや狭い縦長の平面を4段に区画して,どの段にも神話の場面を表わし,上から3段目にがらがらを手にするジャッカルが小さく表現されている[Woolley 1934]。

前稿でも極く簡単にふれたように,チャイルド V. Gordon Childe はこれをエジプトがらがら Egyptian sistrum と呼び,シュメール文明とエジプトの交流を示す要素と認め早くから注目してきた。1928年刊行の初版 *The Most Ancient East* から *New Light on the Most Ancient East* 第四版(1952～1964)まで,この貝殻モザイクで表現された場面を重視し,巻頭にあるいは図版の冒頭にその写真を配置して,シュメール文明の,またメソポタミア文明の性格を論じ,さらにその成立と発展に他の文明が果した役割にも,その可能性を交えながら言及した[Childe 1928, 1934, 1935, 1952]。メソポタミア文明の諸要素のなかにエジプトからの影響を殆ど認めないフランクフォートでも,ウル王墓から出土したリラ共鳴箱の正面に表わされたこのがらがらをエジプトがらがらと呼んでいる[Frankfort 1954]。

ところで,がらがらの資料が貝殻モザイクの表現だけだとすると問題がある。がらがらを振るジャッカルが図文としてのみメソポタミアにもたらされて,楽器の実物は来ていなかった可能性を全面的に否定することができないからである。だがウルの王墓では,実物の一部である貝製の円形鳴子や柄の装飾なども発掘されているので,楽器そのものがシュメールの有力な都市国家ウルの王の葬送に音をそえていたことは確かである。これらの資料を発掘したウーリーもエジプトのがらがらに似ているという[Woolley 1934]。よく分らないのは,ウォードがこのようながらがらについて何も述べていないことである。エジプトからメソポタミアへの影響と認めるジルベールの意見に賛成して言及しないのであろうか,完全に無視したいので全く触れなかったのであろうか。

ともかく,がらがらはエジプトにおいて古くからハトホル女神の祭儀に重要な役割を果した楽器である。他方メソポタミアでは,現在のところ初期王朝3期に属するウル王墓の出土品に限られるので,楽器の構造や楽器に施されている文様などを比較した上で,すなわち十分な根拠をもって下された判断ではないけれども,現在の資料が示すところでは,がらがらはエジプトからメソポタミアにもたらされた楽器,あるいはそれを模倣してつくられた楽器であると認めるのが自然であろう。

外向二頭獅子文というのは,銅板に浮彫で表現されている図文で,その遺物は現在の長さが

43cm, 幅18cmの破片である。現存する部分の上段には, 外側に頭を向けた獅子が対称的に配置され, 下段には裸の男すなわち敗れた敵が倒れている様子, その中央下部には花文が表わされている [Woolley 1934]。恐らく木盾の中央に付けられた装飾板であろうと推測されている。ジルベールは報告書が刊行されて間もなくに, この浮彫銅板を資料として「ウル王墓にエジプト風浮彫？」と題する短い論文を発表した [Gilbert 1937]。2頭の獅子はラガシュ出土のウルナンシェ Urnanshe 奉納板に表わされている浮彫の一部と同じものと見られるので, 全体像は獅子頭をもつ鷲が両翼を大きく拡げ, 両足でそれぞれ2頭の獅子の尻を把んでいる構図であると説明し, この構図はエジプトに由来すると主張している。

獅子鷲像は, かつてニンフルサグ神の象徴と考えられ Imdugud などと呼ばれたが, 新たに Anzu という読み方が広く認められて Anzu-Imdugud と記されるに至ったものである [Fuhr-Jaeppelt 1972]。ただし何を象徴するものであるかは未だに明らかでなく, また2頭の動物は獅子と限られるのではなくて牛や鹿のこともある。なおこの図文は初期王朝期のメソポタミアで, バビロニアとその周辺部において一時的にも覇権を掌握した王の王権を象徴するものではないかというのが私の見方で, 1980年12月21日静岡女子大学において開催された第12回シュメール研究会において発表した。獅子鷲の図文を古代世界全体にわたって問題にしたフール=イェッペルト Ilse Fuhr-Jaeppelt は, エジプトの例として新王国第18王朝のトトメス四世 Tuthmosis Ⅳの戦車の正面に施された図文をあげているだけである。

しかしここで問題なのは外向二頭獅子文の方で, 獅子の長さや配置からみて, エジプト第5王朝第2代サフラー Sahure 王のピラミッド葬祭殿を飾る浮彫にむしろ類似しているとジルベールはいう。そして2頭の獅子は, 初めからファラオを守護し祭儀により清められて過去と未来の霊となり, それが太陽に, 王にそして全ての存在に再生する力を保証する。このような教理はメソポタミアにはないと断定し, ウル王墓出土の浮彫は, エジプトの原型に倒れた敵兵の表現を加えたものだと解釈する。そして外向二頭獅子文の最古の例はサフラー王の葬祭殿にあるので, ウル王墓出土の浮彫は第5王朝初め以後に年代を与えなければならないという。1937年の論文ではサフラー王に始まって, 第6, 12, 18王朝の例が挙げられている。

ところが, サフラー王ピラミッドの発掘報告書によってジルベールが指示した図版43をみると [Borchardt 1913], 外向二頭獅子文は見当らない。この図版に収められているのはすべて浮彫の破片であるが, おそらく玉座に倚坐するファラオの場面と思われる。倚坐する足の下部とその下に枠で囲んだ獅子の一部が見える。獅子の表現には確かに左向きのものと右向きのものとがあるけれども, これらは左向き獅子像の上部には左向きの王が, 右向きの獅子像の上部には右向きの王が表わされている, それぞれ単独の図文である。だからこれらを右と左を向いた二頭獅子文に復原することはできない。そうすると, エジプトで外向二頭獅子文の最も古い確実な例は, 第6王朝半ばのペピ二世時代ということになる。王妃ネイト Neit のピラミッド葬祭殿の壁面で浮彫に彩色を施した表現によってそれを知ることができる。尻尾を交差させた外向二頭獅子文を横に2単位ならべ, 向って左側に人か霊か神かが右向きに表

現されたフリーズが3例，ジルベールの指示した図版ⅣとⅤに収められている[Jéquier 1933]。

この外向二頭獅子文がエジプト最古の例だとすると，ウル王墓の方が年代上は先行することになる。さらにまた王妃ネイト葬祭殿の獅子は，胴部に帯状のものを襷掛けにして表現されていて，飼育された獅子ではないかという疑問も起り，この状態では獅子本来の力を期待することができないのではないかと思われる。対称的配置の動物文はエジプトでも知られているが，ウォードが強調するように，メソポタミアでも早くから行われた図文であった。

問題の戦勝碑は，アッカド王朝のナラム=シン Naram-sin 王がクルディスタン山岳地方のルルビ人との戦闘に勝ったときつくった記念碑である[小野山 1975]。赤色砂岩製で，高さが2mあり，浮彫で表現した多くの兵士をピラミッド形に配置して，その頂点に征服王ナラム=シンを立たせることにより，敵に対する勝利を一つの場面で強く印象づけることに成功している。殆どのシュメールやアッカドの戦勝碑は，枠を設けて数段に区画し，事件の経過を段ごとに表現して物語らせようとしているのに対して，このナラム=シン戦勝碑はその構図が特異である。それぞれの像の特徴から，その由来をエジプトに求めようというのがジルベールの見方である。

ジルベールはこの戦勝碑の浮彫に認められる長痩身の人物，他の兵士よりも大きく表わされたナラム=シン王，倒されている敵兵の姿勢などの表現が，第5王朝にニウセルラー Nyuserre 王によって打ち倒されているリビア首長の浮彫を憶い起させるものだという。しかしアッカド王朝時代の彫像は全般的に写実的傾向にあるので，その手本をわざわざエジプトに求める必要はなかろう。浮彫の場面において最も重要な役割をもつ人物を最も大きく表現する方法は，メソポタミア初期王朝期の奉納板その他においてすでに行われている表現法であるから，ナラム=シン戦勝碑はその伝統を継承したものと理解することができる。そして倒されている敵兵の表現は，西アジアからエジプトまで紀元前四千年紀末から三千年紀末までの間，基本的には同じ姿勢をとっていると思われる。その起源がどこにあるかは興味ある重要な課題であるが，ここではナラム=シン戦勝碑の倒れている敵兵の表現がエジプトから学んだものと考えなければならない根拠も理由もないことを指摘するに止めたい。

ウォードも王を大きく表現するのはシュメールに古い例があり，屍体を屈曲させるところは似ているけれども，倒れた敵兵の表現がエジプトの影響によると考えることは殆ど認められないと反対している。

4 階段式ピラミッドとジッグラト

ジッグラトは，神殿とともにメソポタミア文明の性格を解明する上で最も重要な宗教建造物の一つである。ジッグラトを形づくる諸要素のなかで階層的建築という，機能の核心的な部分に深く関わると考えられる特徴が，エジプトの階段式ピラミッドに由来するというので

あるから周到な説明が求められると考えたのであろうか，エジプトとメソポタミアの交流を示す文物として挙げられた8項目のなかで，ジルベールがかなり丁寧に理由を示して最も詳しく説明した項目である。先ず彼の主張するところを要約すると次のようになる。

ピラミッドは死者，とくにファラオを葬ったものであり，他方ジッグラトは神の祭祀に係わるものであるから対比しえないものと考えるのは誤りである。ファラオの霊魂は死後に民族の守護霊となり，ジッグラトでは死によって定期的に行うようになる神の祭祀が執行される。アッシリア学者のなかには，ジッグラトを一種の空墓をも兼ねていると見做す者もある。ジッグラトとピラミッドの間に何等かの関連を求めるのは，もはや不当なことではなかろう，とコントノ G. Contenau およびパロ André Parrot を参照しながら検討を始める [Contenau 1947 ; Parrot 1949]。パロによると，メソポタミア初期王朝期半ばまでのジッグラトは階層をもついわゆる聖塔ではなかった。洪水のなかでも神が降地できる場所を人工的に高く造成しようとしたのであろう，初期王朝期半ばになると円筒印章の図文に階層的につくられたジッグラトの表現が認められるようになる。そして階段によって神は地上の神殿に至る。

階段式ピラミッドは，エジプト第3王朝の創設者ゼセル Zoser 王のために，ファラオの霊が天と太陽を獲得できるよう祖先霊によって積上げられたと伝える。階段式ピラミッドの形式自体がこの教理の表現と認められるので，この種の階段はエジプトに原型がある玉座の段がファラオを太陽のように思わせるからである。玉座はエジプト第1王朝の初めから存在し，階段式ピラミッドはそれに取って代ったものである。玉座の段というモデルを持たないシュメール人が階層のあるジッグラトを創案して階段式ピラミッドに影響を与えたと見る逆の場合はありえない。ただしメソポタミアからエジプトへの逆の影響が全く無い訳ではない。エルクラ El-Kula の階段式小ピラミッドが，多くの大型ピラミッドと異なり，その建築平面の対角線を正しく四方に向けていてジッグラトと同じである [Stiénon 1950]。これはエジプト第3王朝末に行われた両文明の交流のエジプトにおける表れである。階層をもつジッグラトが登場するメソポタミア初期王朝期半ばは，エジプト第3王朝から第4王朝への移行期に当っている。

以上のような説明に対して，ウォードは2層や3層のジッグラトがメソポタミア原文字期 Protoliterate Period（ウルクⅦ—Ⅲ層，したがってウルク期後半とジャムダト=ナスル期に相当する）にすでに存在する，つまり階層式構造の建築物はエジプトに出現するよりもずっと早くにメソポタミアに認められるので，ジルベールの主張は成立しないと妄断する。しかし階層的なジッグラトの成立をウルク期またはジャムダト=ナスル期に認めるか，あるいは初期王朝期半ば以降と見るかは，メソポタミア考古学者の間でも大きく見解の分れるところであり，ウォードの反論はその一説を自明のごとく安易に採用してジルベールを批判したものに過ぎない。

メソポタミア考古学者のなかにも，ジッグラトの階層的建築に階段式ピラミッドからの影響を想定する考え方がある。コントノも，ジルベールと同じように古代オリエントの編年が

短縮された結果として,その解釈が可能となったことを認め,ジルベールによる階段式ピラミッド成立観を評価する[Contenau 1952]。だがしかし,そもそも階段式ピラミッドの成立に関するジルベールの説明は納得できるだろうか。特に階段状の由来の説明には無理があるように思われる。また一方において,エジプトの階段式ピラミッドの影響によってメソポタミア初期王朝期半ばに成立したと想定される階層的ジッグラトの建築遺構が,比較の可能な状態でまだ1基も発見されていないので,現在のところ,建築上どのような点に影響を受けたかを具体的に議論することはできない。さまざまな角度から議論することができないならば,この問題の実りのある進展は期待することができないであろう。

もっとも,ジルベールの行った検討のなかで,階段式小ピラミッドの方位に対する配置がメソポタミア建築の影響によっていると認めた点は,私には重要な問題を含んでいるように思われる。そしてピラミッドが埋葬のための施設であり,ジッグラトが神の祭祀を行う施設であるために,両者は比較できないという考え方を明確に否定したことは議論の重要な前進であったと評価すべきであろう。われわれはすでに,前四千年紀末におけるメソポタミア神殿の壁面の扶壁が,エジプトの埋葬施設であるマスタバの外壁の仕上げ方に大きな影響を与えたことを知っているからである[Frankfort 1941, 1951]。

5 文化一元論への警戒と外来要素の評価

エジプト文明からの影響によって生じたメソポタミア文明の要素としてジルベールが挙げた7項目のうち,前三千年紀の交流に関連する6項目について,それらを3種類に分け,前稿との関連によってまず丸彫像を取上げ,ついで彫刻の一種である浮彫と貝殻モザイクの表現とそこに表現された遺物を問題にして,最後に建築遺構について議論した。

しかしながら,ジルベールの取上げ方は,それぞれの項目を時代順に議論するものである。この進め方にも,実は彼の主張の主旨が盛り込まれているように感じられるので,そのことについても吟味しておきたい。

ジルベールは先ず,マリの発掘によって出土した粘土板の研究により,ハンムラビ王の在位年代がかなり新しく引き下げられて,紀元前18世紀という新しい年代観が一般的に認められたと切出す。この事によってメソポタミア文明の初期とティニス期(第1・第2王朝)から古王国時代のエジプトとが同時期と認められることを強調し,上エジプトと下エジプトの統一をメソポタミアではウルク期からジャムダト=ナスル期への移行期に当てる併行関係をつくり,それを編年上の基礎として議論を展開する。そして1940年頃までに明らかになった先王朝時代末期におけるエジプトへのメソポタミアからの影響説を肯定して,両文明の間に緊密な接触が存在したことを認めはするが,ジルベールは反作用,すなわちエジプトからメソポタミアに影響した要素として蛇のような長首を絡ませた一対の獣文を取上げ,その動物はアフリカのものであることを強調する[Gilbert 1947]。これは定説とは異なる見方である

[Scharff 1935 ; Frankfort 1939]。

遺憾なことにジルベールの編年は,一般に認められるところとかなり異なって,エジプト第1王朝の始まりを古く考えるか,ウルク期からジャムダト=ナスル期への移行を新しく考えていることになる。独自の編年を使う場合には,当然その根拠を示さなければならないにも拘らず,それが殆どなく,ジルベールはただ断定しているだけである。さらにジャムダト=ナスル期のメソポタミア文明がエジプト文明の生成に与えた影響を強調する学説をどのように評価するかを具体的に示さず,またこの問題に関する論著も全く挙げない。したがってジルベール編年による,メソポタミアでいえばウルク期末からジャムダト=ナスル期までに関わる議論は殆ど意味がない。メソポタミア考古学者がこの論文を評価しない第一の欠点はここにあるのではないかと考える。

一つの特徴的な文化要素が2つ以上の文明に認められるとき,その文化要素の源はどこに求められるか。ジルベールの論述には3通りの説明方法が用いられているように思われる。第1はその文化要素を生みだす原理あるいは思想的背景がその文明の重要な部分を構成しているというもので,階段式ピラミッドと外向二頭獅子文の理解がこれに当るであろう。第2はその文化要素が歴史的に長期にわたって用いられていた事実に重点をおく判断で,「蹲居像」,楽器がらがら,胡坐像,戦勝碑の人物表現法の説明に見られる特徴である。ただしこれは第1のような理解を排除するものではない。第3は両地域とも比較的短期間に認められる文化要素について,年代的に古い方に本をおく解釈で,宮殿正面文円筒印章と象嵌多彩装飾石製容器について用いられている説明方法である。本稿では双方ともその検討を省略したが,前者は定説に反してエジプトからメソポタミアに影響を与えたとジルベールが考えた円筒印章図文であり,後者は両文明の文化交流を示すものとして彼が挙げた8項目のなかで,メソポタミアからエジプトに影響したものと認めた唯一の項目である。

紀元前三千年紀の6項目のうち,私が賛同するか納得することのできたのは,わずか2項目,すなわち楽器がらがらと胡坐像だけである。その場合でも,楽器がらがらの項で述べたように,既に発表されている同じ見方への言及が全くなされていないのが残念である。また検討したそれぞれの箇所で述べたように,不自然な説明に終っていることも少なくない。これも第二の欠点に数えるべきであろう。

ところで他方,ジルベール論文の構成もまた,彼の主張を効果的に述べることができるように組立ててあると推測することができる。一つの意見をもって論文を発表する以上,これは当然のことであるが,読む方は文章に示されていない,あるいはその論述に一種の力を与えているものを感じ取って用心しなければならない。

ジルベールは48ページに述べたエジプトとメソポタミアの併行関係の確認に続けて40ページで挙げた8項目を順番に検討する。行論の必要上もう一度繰返すと,ウルク期末からジャムダト=ナスル期の宮殿正面文円筒印章と多彩象嵌石製容器を,次いで初期王朝期半ばの階層的ジッグラトと「蹲居像」を,さらに続けてウル第1王朝期に当るものとして楽器がらがらと

外向二頭獅子文と胡坐像を，そして最後にアッカド王朝ナラム=シン王の戦勝碑を取上げる。明示してはいないけれども，この順序からみると，ウル王墓とウル第1王朝期を初期王朝期の後期に位置づけていることは明らかである。つまりメソポタミアのジャムダト=ナスル期から，わずかな資料しかない初期王朝期の初めを除くと，初期王朝期の半ばおよび後期をへてアッカド王朝時代に至るまでほぼ連続して検討したことになる。

このようにして，紀元前四千年紀末から三千年紀にわたるエジプトとメソポタミアの文化交流についての結論を示す。メソポタミアからエジプトに影響を与えたのはジャムダト=ナスル期の多彩象嵌石製容器や階段式小ピラミッド(ジルベールが挙げた8項目にはなくて，階段式ピラミッドの項で付随的に取上げられた)のようなマイナーな分野であり，メソポタミア文明の発展過程はエジプト文明からの連続的な影響下にあったと。そうするとジルベールの主張は，エジプト文化一元論の復活を意図するものではないかという疑念が起る。

いかなる文明をとっても，その文明を発信地とする文化一元論が成立しえないことは，1940年頃以降においては常識になっている。このことがジルベール論文に見られる第三で最も重要な欠点であろう。したがって，メソポタミア考古学者や美術史家がジルベールのこの論文を殆ど評価しなかったのは，理由のないことではない。

外来の要素を殆ど問題にしようとしないメソポタミア考古学の趨勢のなかで，その初期王朝期におけるエジプト的要素を私が新しく取上げようというのは，文化一元論とは異なる視点からである。外来の要素が，一つの文明の生成と発展に重要な役割を果している場合が少なくない。西ヨーロッパ文明にとって地中海世界から摂取したキリスト教を，また日本文明にとって朝鮮半島や中国から学んだ仏教を，それぞれの文明の最も重要な構成要素と認めることに異論はないであろう。キリスト教や仏教が西ヨーロッパと日本にそれぞれ受容されたのはどのような時代であったかということも，それぞれの文明の性格を論ずる上で重要である。

ギリシア文明にあっては，古典文化の開花に先だって外来の諸要素を積極的に受容した東方化様式の時代があった。外来の要素が存在するにも拘らず，それを認めないのは独善である。外来の要素があるか否かの議論に止まることなく，それらをどのように受容したかを問題にすることがさらに重要である。最後に村田数之亮先生の言葉を聞こう[村田 1990]。ギリシアにおいて「東方化とはただオリエント化することではない。この異質なものを摂取して，自己本来のものをより高め，より広く展開することである」。

ここ数十年の間ほとんど問題にされなかった，紀元前三千年紀前半のメソポタミア初期王朝期における外来要素を，改めて私が取上げるのは，シュメール=アッカド文明の成立過程を新しい視点から検討し，他の文明の生成期と比較しながら，その文明の性格を明らかにしていきたいと考えるからである。

謝辞

小論文を作成するに当って以下に挙げる方々と諸機関にお世話になった。心から御礼を申し述べたい。それは金関恕，清水芳裕，高橋克寿，坪井清足，中野智章，前川和也，森下章司，山中一郎，山本茂，横山俊夫の諸氏と，京都大学大学院文学研究科考古学図書室，同史学科閲覧室，天理大学附属図書館，東海大学湘南図書館，東京芸術大学図書室である。

参考文献

Becker, Andrea (1993) *Uruk, Kleinfunde* I, *Stein, Ausgrabungen in Uruk-Warka* 6, Mainz am Rhen.

Borchardt, Ludwig (1913) *Das Grabdenkmal des Königs Sahure*, Bd. II (*26. wissenschaftliche Veröffentlichungen der deutschen Orient-Gesellschaft*), Leipzig.

Childe, V. G. (1928) *The Most Ancient East*, London.

Childe, V. G. (1934, 1935, 1952) *New Light on the Most Ancient East*, London.

Contenau, G. (1947) *Manuel d'archéologie oriental*, IV, Paris.

Contenau, G. (1952) *Le Déluge babylonien suivi de Ishtar aux enfers, la Tour de Babel*, Nouvelle édition, Paris.

Frankfort, Henri (1939) *Sculpture of the Third Millenium B. C. from Tell Asmar and Khafajah, OIP* 44, Chicago.

Frankfort, Henri (1941) The Origin of Monumental Architecture in Egypt. *The American Journal of Semitic Languages and Literature* 58.

Frankfort, Henri (1943) *More Sculpture from the Diyala Region, OIP* 60, Chicago.

Frankfort, Henri (1951) *The Birth of Civilization in the Near East*, Bloomington.

Frankfort, Henri (1954) *The Art and Architecture of the Ancient Orient* (*The Pelican History of Art*), Harmondsworth.

Fuhr-Jaeppelt, Ilse (1972) *Materialien zur Ikonographie des Löwenadlers Anzu-Imdugud*, München.

Gilbert, Pierre (1937) Un relief égyptisant dans les tombes royales d'Our? *Chronique d'Égypte* 23.

Gilbert, Pierre (1947) Fauves au long cou communs á l'art égyptien et á l'art sumérien archaïques. *Chronique d'Égypte* 43.

Gilbert, Pierre (1951) Synchronismes artistiques entre Égypte et Mésopotamie, de la période thinite à la fin de l'Ancien Empire égyptien. *Chronique d'Égypte* 52.

Hall, H. R. and C. Leonard Woolley (1927) *al'Ubaid, Ur Excavations* 1, London.

Jéquier, Gustave (1933) *Les pyramides des reines Neit et Apouit*, Le Caire.

Jordan, Julius (1928) *Uruk-Warka : Wissenschaftliche Veröffentlichung der Deutschen Orient-Gesellschaft* 51, Neudruck der Ausgabe 1928, 1969.

Lenzen, Heinrich (1960) *XVI. vorläufiger Bericht über die von dem Deutschen Archäologischen Institut und der Deutschen Orient-Gesellschaft aus Mitteln der Deutschen Forschungsgemeinschaft unternommenen Ausgrabungen in Uruk-Warka*, Winter 1957/58, Berlin.

Manniche, Lise (1991) *Music and Musicians in Ancient Egypt*, London.

Moortgat, Anton (1967) *Die Kunst des Alten Mesopotamien*, Köln.

Parrot, André (1949) *Ziggurats et tour de Babel*, Paris.

Petrie, W. M. Flinders (1903) *Abydos*, Part II, *Memoire of the Egypt Exploration Fund*, 24, London.

Pinch, Geraldine (1993) *Votive Offerings to Hathor*, Oxford.

Quibell, J. E. (1900) *Hierakonpolis*, Part 1, *Egyptian Research Account*, 4. London.

Robert, Alison (1995) *Hathor Rising : The Serpent Power of Ancient Egypt*, Devon.

Scharff, Alexander (1935) Neues zur Frage der ältesten ägyptisch-babylonischen Kulturbeziehungen, *Zeitschrift für Ägyptische Sprache und Altertumskunde* 71.

Stiénon, Jean (1950) El Kôlah. Mission de la Fondation Égyptologique Reine Élisabeth, 1949, *Chronique d'Égypt* 49.

Strommenger, Eva (1964) *The Art of Mesopotamia*, London.

Ward, William A. (1964) Relations between Egypt and Mesopotamia from Prehistoric Times to the End of the Middle Kingdom. *JESHO* 7.

Woolley, C. Leonard (1934) *The Royal Cemetery, Ur Excavations* 2. London.

小野山節(1975)メソポタミアの美術Ⅰ—紀元前6千～前2千年紀—新規矩男(編)『古代西アジア美術』(大系世界の美術2)学習研究社.

小野山節(1996)メソポタミア初期王朝期の丸彫人物像—そのエジプト的要素—『西南アジア研究』44.

ドマ, フランソワ(大島清次訳)(1966)『エジプトの神々』文庫クセジュ.

プルタルコス(柳沼重剛訳)(1996)『エジプト神イシスとオシリスの伝説について』岩波文庫.

村田数之亮(1990)『ギリシア美術』第2版, 新潮社.

屋形禎亮(訳)(1978)シヌヘの物語　杉勇他『古代オリエント集』筑摩世界文学大系1.

(京都大学)